

2005 年 1 月 24 日



原子力長計 市民ウォッチング

新長計策定会議における FBR サイクル技術に関する審議に向けての 要望書

グリーン・アクション気付 〒 606-8203 京都市左京区田中関田町 22 — 75 — 103
Phone: 075-701-7223 Facsimile: 075-702-1952 <http://www.greenaction-japan.org/>

原子力委員会 委員長、新計画策定会議 議長 近藤駿介様
新長計策定委員各位様

——これまでの研究開発のあり方を検証することが議論の出発点であるべきです

今まで9回にわたって長計に示されてきたFBRサイクル技術の研究開発計画はどのようなメリットを国民に約束し、結果としてどのような成果を生み出してきたのでしょうか。まずこの評価を行った上で、新長計でのFBRサイクル技術の研究開発について論じるべきです。

——新長計は民意を踏まえたものでなければなりません

原子力委員会が自ら行った長計についての最新のパブリックコメント（2000年10月）では、寄せられた意見の9割が「もんじゅ」開発に反対していました。この結果を謙虚に受け止める必要があります。もし、この結果が国民の意思を正しく反映していないと強弁されるのであれば、別の説得力を持った根拠を示す必要があります。

——審議のもとになる資料は公平なものでなければなりません

名古屋高裁でのもんじゅ訴訟において国は原告側の主張に対し、あらゆる面でまともに反論できませんでした。一方的に「もんじゅ」のメリットを唱えることはできても、安全性についての審査の誤りを覆すことはできませんでした。今、新長計の策定にあたって審議の土俵に上がっているのは「もんじゅ」を推進している立場からの資料だけであるように見受けられます。安全性が確認できないまま推進する論議では、国民合意が得られるはずはありません。

もし、公正なプロセスを経ずに「もんじゅ」計画の継続を決めてしまえば、国民の理解はより遠ざかってしまうことでしょう。新長計が、安全性、経済性、実現可能性などいずれにおいても説得力を持ったものとなるよう、以下を要望いたします。

要 望 事 項

1. FBR サイクル技術に関する審議に先立って、これまでの研究開発のあり方を検証すること
2. 国民の9割が「もんじゅ」開発に反対していることを踏まえた議論とすること
3. 審議のもとになる資料は推進・反対双方の立場からのものを採用すること